

## 第9回「災害対策セミナーin神戸」要旨報告

私たち市民は災害から被害を少なくするために、日ごろからどんな備えをするか

### 1. はじめに

平成28年1月22日(金)午後1時～5時、第9回の災害対策セミナーが、神戸国際会議場502号室で開催された。主催は(公社)日本技術士会近畿本部、協力は近畿本部建設部会、同・登録防災研究会、総合司会は貴志建設部会代表で、参加者63名であった。この紙面をお借りし、当セミナーの要旨を報告する。

### 2. 開会挨拶(北村友博本部長)

「災害対策セミナーin神戸は、2000年1月に開催された第4回震災対策技術展「都市防災を考えるセミナー」に、日本技術士会建設部会の主催で、都市災害に備える技術者集団として開催したことに端を発している。そして、より多くの方々に参加していただくため一昨年の第7回から近畿本部の主催とし、近畿本部建設部会と防災研究会の協力としていることなどの説明を含めた挨拶があった。



北村本部長

### 3. 基調講演(紅谷昇平 神戸大学社会科学系教育研究府 特命准教授)

「パートナーシップ型防災と私に出来ること」

神戸大学の紅谷准教授は、京都大学修士課程終了後、企業において、まちづくりなどのコンサル



紅谷准教授

ルティング業務に携わった経験を有している。その後、神戸大学において博士課程を終了され、人と防災未来センターに勤務された。このとき、東日本震災の被災地に入り、宮城県庁や国現地対策本部への支援を行われた。基調講演では、防災は人任せにせず、それぞれの立場の方が当事者意識を持つことが重要であるとの説明をされた。

講演の前半では、家庭・地域での対策について、後半ではNPOや専門家の役割や支援について解説された。また、産学民のパートナーシップの防災例として、河内長野市のガス会社の社屋新築に伴う地域防災とのかかわり(防災協定の締結など)について解説された。NPOや専門家の役割

や支援については、地域コミュニティの特徴や実際の震災時に発生した問題点、ボランティアセンターによるコーディネート例などについて言及され、支援者の支援の必要性について述べられた。最後に会場からの質問を受けた。

Q:(情報部門技術士)混在する組織の場合の意思決定はどうか、問題が生じるのでは?

A:(紅谷)地域の普段の活動と防災訓練が大切、地域で話し合って準備する。まちづくり活動と市民防災活動とで役所の所管が違う場合には、情報共有に問題が生じやすい。

### 4. パネリスト4名からの話題提供

(1) 野崎隆一氏(NPO法人 神戸まちづくり研究所 理事長)

阪神淡路震災後、ボランティアセンターに登録、一級建築士の資格で活躍した。その後、関西建築ボランティアに入会し、5棟の被災マンションの復興に関わった体験を話された。また、現在は東日本震災における4件のアドバイザーを務めている。被災者は情報の不足により、正しい判断ができない状況にある。情報を与える側が正しい情報をわかりやすく、タイミングよく伝えることが大切である。特に、我々専門家は、正しい情報を如何に解りやすく伝えるかについての

努力を怠ってはいけないと話された。

## (2) 居倉順子氏（泉南市女性消防団 元分団長）

泉南市の女性消防団は平成5年4月に大阪府下で初めて女性消防団として発足した。女性特有のソフトさ、きめ細かくやさしい思いやり等を消防活動の中に活用することで、市民への防火予防啓発、広報活動、防火指導等への活躍を期待して導入された。設立当時は17名で現在は20名の女性消防団員「サザンスプリング」の名称で活躍している。阪神淡路震災時の支援をきっかけに女性団員の結束が強まり、防災啓発のものづくり（紙芝居など）が始まった。以降、全国大会の開催により大阪府下の女性消防団員が増加するなど、女性の横のつながりによる、地域活動が活性化している。大阪府下の女性消防団員数は平成26年4月1日時点で20市町（20団体）で195名でありご活躍いただいています。

## (3) 西濱靖雄氏（日本技術士会 近畿本部 防災支援委員会 委員長）

天災は忘れられたる頃来たる、というのは天災を忘れるのでは無く、天災への備えを忘れた頃にやってくるという意味である。今日くるか明日くるかわからない災害に対して他人事になっていないだろうか。普段から当たり前のように、自分のこととして考えよう。日本技術士会では、地域に根ざした防災学習を行っている。震度について理解しよう。今すぐできる家具の固定を行おう。など、防災学習の教材をもとに、防災教育の一部について具体的に解説していただいた。

## (4) 沖優子氏（奈良県王寺町美しヶ丘自主防災会 会長 町会議員）

約30年を経過した1,400世帯人口約4,000人の美しヶ丘自治会において、実際に自主防災会を設立し、現在につながる活動について解説していただいた。災害直後は「公助」が期待できないことから「自分の命、家族、財産は自分で守る」をコンセプトに「共助」について取り組んでいる。常時から「顔の見える関係」を築いておくことが重要であると痛感している。今後の課題として、自治会との連携、地域民生委員との連携等について取り組んでいくことが必要であると話された。



パネリストの方々 左から 野崎隆一氏 , 居倉順子氏 , 西濱靖雄氏 , 沖優子氏

## 5. パネルディスカッション

パネルディスカッションについては、前述した4人のパネラー（野崎・居倉・西濱・沖・各氏）に加え、コーディネーターとして、森川勝仁（近畿本部防災研究会会長）及び総合コメンテーターとして、紅谷昇平（神戸大学特命准教授）合計6名にフロアーが参加という形で実施した。

コーディネーターからパネリストへの質問

Q1: (森川) 災害が危惧される場合、私たちに何ができるのでしょうか？



森川会長

技術者として何が必要でしょうか？皆さんのお考えをお聞かせください。

A1：(野崎)

- ・地域の自助については、時間ごと（1h 後，3h 後，6h 後）になにをしているかを訓練時にイメージするのが大切
- ・日常的にできるイベントを持つこと，お金の流れも理解しておくこと。

A2：(居倉)

- ・東日本震災以降，消防団員も自分の命も自分で守るように変わってきた。（団員の死を通して）
- ・メディアに関して，阪神淡路の頃は情報量が少なかったと感じる。（東日本に比べて）
- ・安否確認などの情報の大切さを感じている。（団員も家族の安否さえ解れば働けると言っている）

A3：(西濱)

- ・今すぐできる家具の固定，震度 5 で家具が倒れる，震度 6 で木造家屋に影響が出る事の啓発
- ・ビルの下（地面）と上層階では揺れが異なることの理解・啓発

A4：(沖)

- ・まず第一に逃げるルートと集合場所の決定（探しに行かない）
- ・火災に備えた訓練（自分の地域では津波は無いため）
- ・今後地域にどのような専門家が居るのかデータベース化したいと考えている。

Q2：(森川) 防災学習について，ご苦労や何が大切かお話をください。

A1：(沖)

- ・子供に対する防災教育は小学校などでも実施しており，充実していると感じる。問題なのは団塊の世代それも男性。

A2：(居倉)

- ・子供に教育に行くと，家族に伝わることが多い。AED の使い方など子供の方が覚えが早い。

A3：(野崎)

- ・教育は難しい，今言われている組織作り，マニュアル作りは役に立たないだろう。
- ・訓練すべきは，混乱（カオス）の中でどうするのかを考えることが重要なのではと思っている。

A4：(西濱)

- ・防災教育の場に参加者が集まらないことも多いが，諦めず継続することが重要と考えている。
- ・多くの組織との連携が大切である。地域と行政を繋ぎたいと考えている。

#### 会場からの質問

Q1：(技術士) 研究機関（大学）と地域に溝があるのではないかと？交流が必要なのでは？

A1：(野崎)

- ・地域の活動が活発だと，大学の方から研究に来ている場合もある。大学が口を出すのではなく同席するだけのケースもある。

A2：(紅谷)

- ・大学の研究と現場が乖離している例はある。一方で、関西，特に神戸～大阪地区は大学の研究者が地域に入って行こうという動きも増えている。

A3 (西濱)

- ・地域に入るのは難しいと感じる。防災訓練にしても，自治会のみでは開催は難しいだろう。消防主体だとパターンがマンネリ化しそう。自分の例でも，自治会と消防が一緒に行えるまで，2～3 年かかった。話し合える場作りが大切。

Q2：(一般) 大地震発生時に何を持ち出したらよいか

A1：(紅谷)

- ・気づかないところでは、薬の類、アレルギーに関するもの、ミルク、紙オムツ、柔らかい食事、甘いオヤツなど。一般的でなく、個人的に必要なものは、支援物資として届きにくい。他にはメガネなど。

Q3：(神戸女子大) この様な会において、女性や若い人の参加が少ない。その様な忙しい人に声が届くためにはどうするのか、どうしたら良いのか？

A1：(居倉)

- ・女性消防団は団結時平均 35 歳ぐらいだった。共通した目的を見つけたことが、継続し発展した事につながったと思っている。女性の方が横のつながりや広がり大きいと思う。

A2：(野崎)

- ・地域の活動においても、1 人／世帯ではなく、家族で出て貰うよう働きかけている。地域のイベントで、お金を稼いでいるケースは女性が主体である。集中・組織・プランは男性が得意だが、女性のはつながりが得意であると感じる。

Q4：(防災士) 地域に問題行動を起こす困った人がいる。この様な人への対応は？

A1：(沖)

- ・自主防災会は助けに行く組織では無いと常時説明している。
- ・最終的には、民生委員等の行政に相談した方がいいと思う。

A2：(紅谷)

- ・自主防災組織の活動は、義務ではなくボランティアであるべき。
- ・実は助けられにくいのは、問題のある困った人ではなく、近所づきあいの少ない存在感の薄い人であることが多い。

## 総括

(森川) では最後に、紅谷先生より総括をお願いします。

(紅谷)

- ・防災がメジャーになれないのは「おしゃれ感が無い」からかも知れない。そのためにも本日のパネリストの方々のような女性目線は防災業界に大切である。
- ・防災は、楽しみながらやるのが長続きする秘訣だろう。防災がきっかけで組織ができるより、もともとの組織（祭りなど）が防災を行う方がうまくいく例が多い。
- ・無理なく楽しく長続きする防災に取り組んでいていただきたいと思う。

## 7. 閉会挨拶（杉本哲雄副本部長）



杉本副本部長

杉本副本部長より、本日の参加のお礼を申し上げた。また、本年度セミナーの大テーマは震災教訓の継承と自己決定力向上～新たなステージに入った災害への備え～と題して開催され、7つの分科会のうち、我々技術士会は、表題に上げたテーマのもとに議論を行った旨の説明が行われた。最後に、災害においては、自助・共助・公助の概念の理解が必要といわれており、このたび、公助をテーマとして、2月6日(土)大阪科学技術センターに場所を移して、第35回地域産学官と技術士との合同セミナー(大阪)を開催するので、こちらもふるって参加頂きたいとの説明があった。

近畿本部建設部会・防災研究会  
文責：幸徹（建設・総監）